

— B U S S H I —

令和・仏師・三人展

《江場琳觀・加藤巍山・松久靖朋》







— B U S S H I —

凡夫でありながら人々が礼拝する対象を生み出す。それは、「愚かな自分ごときでその責を負えるのか」という、底知れぬ恐ろしさに駆られる行為です。仏とは人智を超えた存在であり、仏像とは千年の時を超えうるもの。日本の仏像は、平安のたおやかさ、鎌倉の猛々しさと、時代ごとの美意識を映し変化してきました。

ならば現代に仏を刻む意味とは何か。単なる死後の安寧や現世利益の祈願ではない。時に愚かな人々を憂い、それでも許し迎え入れる、現代の祈りのかたちと美意識にかなった存在の表出だと言えるでしょう。緻密な設計を積み上げながらも、人の手業の匂いさえ消し去り、髪の本一本から指先まで気品と優雅さを添えたい。

過去の名作の焼き直しではなく、今にふさわしくそれでいて普遍的であること。そんな途方もない理想を胸に、もがき苦しんだ先にならば残すべき価値が宿るかも知れない。そう思うのです。

江場琳観

昨今のテクノロジーの発達が目覚ましく、さらに加速し、人が人である意味が問われている現代。

人々の生活は多様化し、豊かになる一方で人間性は空洞化している。

形骸化した美ではなく、真に求められる美とは何か。祈りとは。

仏と向き合い、ひと彫りひと彫り自らに問い続ける。

だからこそ、本物であろうとする態度と、“本物である”ことは重要である。

令和の時代に仏像を彫り、未来に向けて伝え残すという意義は深く重い。

加藤巍山

仏像は、単なる彫刻作品ではなく、祈りの対象です。

尊像と礼拝者が、まっすぐに向き合えることが何より大切だと考えています。

そして、礼拝者に代わって、木の中から御姿を彫り起こすのが仏師という存在です。尊像に彫り手の私心が入り込まないよう心掛け、技術のみに頼った中身のない彫像にならないよう、日々自分自身を省みながら鑿をふるっています。

欲張らず、できるだけ謙虚に、まっさらな気持ちで彫刻刀を握り、その結果として彫り上がった尊像に、言葉では表せない尊い御姿が顕れていたとすれば、それが理想です。

京仏師・松久五代目としての役割と責任を胸に、日々造仏に向き合えるこの境遇に感謝しています。

そして、このたび仏師三人展というご縁をいただけたことも不思議な導きと感じています。造仏を通じて、一隅を照らせるよう努めてまいります。

松久靖朋

江場琳観 | EBA Rinkan

- 1973年 愛知県に生まれる
1992年 松久宗琳佛所に入門
2002年 江場佛像彫刻所に加入、雅号を「琳観」とする
2004年 法多山尊永寺(静岡)弘法大師像開眼に際し、高野山真言宗 資延敏雄管長より褒賞を賜る
2014年 江場佛像彫刻所 代表就任
2016年 天瑞山大安寺(北海道)釈迦三尊像開眼に際し「大仏師」号を拝受
2026年 大正大学(東京)《旅に出るブッダ像》制作中(11月初旬落慶予定)

[主な個展]

- 2023年 「江場琳観作品展」GINZA SIX 銀座 葛屋書店／東京
2021年 「江場琳観作品展」GINZA SIX 銀座 葛屋書店／東京
2013年 「一仏像彫刻の美―江場琳饗・琳観展」名都美術館／愛知
2005年 「1000年スパンのものづくり～仏像と森～」愛・地球博／愛知
2004年 「江場琳饗・琳観展」名都美術館／愛知

[主なグループ展]

- 2013年 「ON BUSSHI展」JR大阪三越伊勢丹(現ルクア大阪)／大阪
2009年 「江場佛像彫刻所一門展」愛知県美術館ギャラリー／愛知

加藤巍山 | KATOH Gizan

- 1968年 東京都に生まれる
2020年 Christie's Japanese & Korean art出品('21、'22／ニューヨーク・アメリカ)

[主な個展]

- 2026年 「神奈備／加藤巍山展」アートフェア東京YUMEKOUBOU GALLERY／東京
2023年 「天地開闢／加藤巍山展」アートフェア東京YUMEKOUBOU GALLERY／東京
2019年 「示現／加藤巍山展」日本橋高島屋美術画廊X／東京

[主なグループ展]

- 2025年 「FINE ART ASIA」Hong Kong Convention and Exhibition Centre／香港
「Timeless Dialogue」大阪・関西万博 第3回日本国際芸術祭
YUMEKOUBOU GALLERYブース EXPOメッセ「WASSE」／大阪
2024年 「Printemps Asiatique Paris 2024」Pagoda House／パリ・フランス
2017-19年 「驚異の超絶技巧！―明治工芸から現代アートへ―」
三井記念美術館／東京、岐阜県現代陶芸美術館、山口県立美術館、
富山県水墨美術館、あべのハルカス美術館／大阪

松久靖朋 | MATSUHISA Seihou

- 1986年 京都府に生まれる
2006年 彫刻をはじめる
2019年 比叡山延暦寺《広野像》奉安
法隆寺《伎楽面》東京国立博物館蔵 復元模造
2020年 北海道大道寺《千手観音菩薩》奉安
2025年 群馬泰寧寺《聖観音菩薩》奉安

[主なグループ展]

- 毎年 「仏教美術展」京都文化博物館／京都(毎秋開催、今年は63回目)
2020年 「松久展」GINZA SIX／東京
2013年 「ON BUSSI展」JR大阪三越伊勢丹(現ルクア大阪)／大阪

このたび高島屋では、「―BUSSHI― 令和・仏師・三人 展《江場琳観・加藤巍山・松久靖朋》」を開催いたします。

仏師とは、“仏像を専門に制作・修復する職人”、或いは“仏教の信仰対象である仏像を専門に制作する彫刻家”、とも言われます。

ここでひとつの問いが生まれます。「仏師は芸術家なのか、職人なのか、それとも宗教者なのか」

芸術家は「自分は何を表現するか」を起点に制作を始めるのに対し、仏師は一定の図像的制約の前に「自己をどこまで退かせるか」を起点に始めると言えるのかもしれませんが。そして、仏師が生み出すその作品は「仏」ではなく、鑑賞者が思わず頭を垂れたいなる「存在感」そのものとも言えそうです。

それでは“仏像”を「仏」にしているものは何なのでしょう。言い換えると、「祈られる仏像」と「鑑賞される仏像」の境界はどこにあるのでしょうか。

そこを読み解く鍵は仏師が消しきれなかった「個」にあるのかもしれません。即ち、仮に仏師とは「何をつくるか」より「受け継いだ型をどう生き直すか」を問われる存在であるとするならば、仏師が消そうとしても消しきれなかった「個」が現れたその瞬間に仏師は芸術家にも成り得ます。そして、仏師とは「信仰・職人・芸術家という三つの立場の境界に立つ人」、と定義づけられるのではないのでしょうか。

「なぜ、いま仏を彫るのか――現代仏師における〈信仰・伝統・個〉のせめぎ合い」。

仏像という千年以上続く形式を通して、2026年の人々が何を祈り、何をつくり、何に価値を認めるのかを問う展覧会になれば、いまこの令和の時代の仏師三人展を開催する意義が生まれると思い企画いたしました。

どうぞご高覧賜りますようお願い申し上げます。

高島屋美術部

―BUSSHI―

令和・仏師・三人 展《江場琳観・加藤巍山・松久靖朋》

東京展＝2026年10月14日(水)～10月19日(月)

高島屋日本橋店本館6階 美術画廊

〒103-8265 東京都中央区日本橋2-4-1 Tel.(03)3211-4111

午前10時30分～午後7時30分

【ギャラリートーク】 10月17日(土) 午後3時～

京都展＝2026年10月28日(水)～11月2日(月)

高島屋京都店6階 美術画廊

〒600-8520 京都市下京区四条通河原町西入真町52 Tel.(075)221-8811

午前10時30分～午後8時

【ギャラリートーク】 10月31日(土) 午後3時～

名古屋展＝2026年11月11日(水)～11月17日(火)

ジェイアール名古屋タカシマヤ11階 美術画廊

〒450-6001 名古屋市中村区名駅1-1-4 Tel.(052)566-1101

午前10時～午後8時 ※最終日は午後4時閉場

※営業日・営業時間などは変更になる場合がございます。詳しくは各店ホームページでご確認ください。